

馬尾坡祖全集

卷一

しまねとしほ ばんしゅうだい かん
島尾敏雄全集 第13巻

一九八二年五月二五日発行

著者 島尾敏雄

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二丁一二二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六一七九九

堀内印刷・美行製本

© 1982 Toshio Shimao

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

島
尾
敏
雄
全
集

第 13 卷

ブックデザイン

平野甲賀

五月二十六日の記

六号記

伊東幹治著「阿仁大作」

ヴァイキング釈義

私の文学的信条

偏倚

時評風な

怯懦

翻訳文で読んだカフカ

阪神地区の同人雑誌について

もっと真夏の輝きを！

「青年の環」について

43 40 39 37 35 31 29 27 16 15 14 13

今後の文学、というアンケートへの答え	44
九月二十五日同人会記	46
ふしあわせの魅惑	49
歴史のすきま	51
なまけ者の天国	54
イタリア写真派	56
パール・バック著「郷土」	58
窮屈な気分	59
久坂葉子らのことなど	61
遁辞	63
湯槽のイドラ	65
滑稽な位置から	66
「イヴの総て」の価値	74
「屍の街」を読んで	75
関係には、誤解が	76

犬への怖れ

近況

アンケートへの答え

鈴木正四著「祖国の解放」

阿川弘之著「春の城」と真鍋呉夫著「天命」

新聞の表現

風の吹きだまり

林富士馬氏への返事

貫井住宅

騒音

患者の申立て

幼き日の思い出

跳び越えなければ！

詩人の死など

阿川弘之著「魔の遺産」

青野晋弥著「海の傷痕」

現実を生きる苦悩

「私鉄文化」夏秋合併号を読んで

夢について

忘れがたい一行

電話恐怖症

壺井栄編「野の草のように」

太田博也著「風ぐるま」

室生犀星著「黒髪の手紙」

不安への支え

木島始著「四つの蝕の物語」

梅崎春生著「砂時計」

「広島郵政」六十八号小説選評

生者の怯えの中で

小島信夫著「島」

「広島郵政」七十号小説選評

妻への祈り

窪田精著「ある党員の告白」

「夢の中での日常」あとがき

秋の季節

埴谷雄高と「死霊」

「広島郵政」七十三号小説選評

椎名麟三著「愛と自由の肖像」及び「猫背の散歩」

重松教授の不肖の弟子たち

「島の果て」あとがき

婦省学生の演劇

第一回読書会に参加して

一つの反応

夫から

非超現実主義的な超現実主義の覚え書

宮崎の印象

さよなら真夏の輝きよ！

妻への祈り・補遺

われわれの中のクリスマス

今年の仕事

伊東さんのこと

小説の素材

長崎のロシヤ人

吉行淳之介の短篇

消夏法

大江健三郎著「われらの時代」

東洋史の入口で

カゴシマの文学的な環境

荒れた日に遊ぶ子ら

日本の作家

I

二葉亭四迷

木村曙

幸田露伴

森鷗外

樋口一葉

国木田独步

田山花袋

正宗白鳥

鈴木三重吉

武者小路実篤

豊島与志雄

室生犀星

牧野信一

347 340 333 327 320 313 306 299 292 285 278 271 264

小林多喜二

林芙美子

II

豊島与志雄小論

阿部知二小論

舟橋聖一小論

381 377 368 360 354

文学エッセイ I

1946—1959

五月二十六日の記

晩春の甲麓は群緑の重量に風がさやさやと充実してゐるやうに、はた目には見えた。その莖や葉をしさいに点検すれば緑の虫が随処に附着してゐるだらう。その虫は春の実体のごとく蠢いてゐるだらう。下界は陽はあたゝかだが上空は風が飄と通り過ぎる。今日はちぬの海は群青で木国淡島もはつきり近い。同人三人会合して、その記を認めて回覧のガリ版を刻す。大垣国司五月二十五日夕、島尾を訪ひ一泊。翌二十六日（日曜）庄野潤三来て、光耀創刊号発刊記念会近畿の巻第一次を演じた。

（この会合は数次に互つて演ぜられるであらう）話題率ね文壇登録志願者（挨拶状を作りつゝある若者）全国版で麦酒のツマミとするに足りて充分（？）であつた。そして当然又晩春の薔薇のやうに悒鬱になつてしまつた。御し難き一匹の虫よ。夜中になるとその虫は踊り出して僕を不眠にかりたてる。この会合では、一体どんなお話をしたか。玉くしげ *玉くしげ* うらしま……どうすれば侮蔑されずに財産がつくれて冊子を毎月出し、そしてそして巧妙に註釈者を誘惑して売名の欲望を満すことが出来るか。

六号記

何ともむしやくしやしてゐた日々と時の流れの中で急に自分の醜惡な文字で謄写してみようと（それで僕の精神に集中という現象が起つたらもうけもんだ）八月のはじめの三日間をつぶして、御覽のやうなものを仕上げました。林さんに手渡された光耀三輯の割付及原本たる原稿一束を活字版で上梓する才覚がないまゝ、いらいらしてゐたのですが、一応かうして二十冊の複写本が出来たわけであります。紙がないこと（といふのは知慧足らずで物の循環にあき盲だといふことに他ならず）で「二十」といふバビロンの泥章のやうな数字をえらんだ天邪鬼振りを、同人諸兄よ！ 御寛容下さい。之はたゞ原本の複製で、いづれ活版にて陽の眼を見るまでの、私一個の鬱屈の何々の変形といふものであるのかも……

八月三日午後五時三十分。

伊東幹治著「阿仁大作」

(一) 例へば自分勝手にメモの上に————かういふ線と————かういふ線を引いて見て、この二つの線を組合せたやうな小説、といふのが、私の「阿仁大作」の読中感だ。それからこんな感じ——▽

(二) さういふ言ひ方では何の事か分らないが、登場者たちの名前は、明らかに二つのグループに分け得るもので、一方は阿仁、生亀といふ発声といふより呼吸の結果のやうな音ア(二)、イ(キ)(此の言ひ方も変なもので「ア」も「イ」もれつきとした vowels であるのだが——)といふ非常識な符号を持つた人達に対しては神谷、池上、竹下、松山、鉄。……等自然現象風な(谷とか池とか竹とか山とか鉄)符号の人たちと、由紀、古、利、芳……等抽象の名(?)を持つた人達のグループが、お互に繩をなふやうにもつれ合つて行く。さういふ感じの切傷を見せられつつ読んでゐる訳だ。

阿仁大作は決してすつきりとはしてゐないが、眼がはつきりしてゐて物おちする事がなく、mongoloid なりに血色よく頬に靨を見せた、生活の達人で、その達人が「復員小説」を展開して見せようといふ、大作君のせりふではないが、「悪い気持ではない。」私はゆつくりと先を読んで行く。

(三) 今活字を離れて休息してゐる私は、禿と仇名された支那苦力と一匹の小鳥との挿話のことを考